自ら朝鮮人たらんと努められたことは、吾人が感泣に堪えないない所だ』と言うたそうである。氏に由つて入信した信者は実に千人以上で、……』」と述べている。

経済的バックの全くない、時折の教友からの献金のみの生活は極めて貧しく、夫人は自分の髪を切って生活をしたとのことである。極度の貧にて、飢餓状態に陥ることしばしばで、聖書講堂に集まった人々に食べさせるものがなく、夫人も子供も食べられず、裏の畑でしゃがみこんで泣いたこともあるといわれる。

そんな貧しさの中、辻説法をし、トラクトを配り、夫妻の温かさにだんだん人々は飛びこんでき、近所の子供たちのきたない手足を洗い、吹出物に膏薬をはり、はやり目に眼薬をさし、そんな中で、「朝鮮語羅馬書」も出版している。(12)

朴魯沫は「彼が一九〇〇年（明治三十三年）に結婚したのち、ある日のこと、いつものように豆腐とおからを売りに来た豆腐屋が門を叩いても何のこたえもない。もう一回来た時にも人気がなく静かなので、あやしんで門を開き中に入った。室内を見まわすと二人の夫婦は祈るが如く頭を上げ、部屋で倒れていた。乗松兄の手にふれると手がつめたくなっていた。あまりの飢えに卒倒していたのである。……（中略）……

彼は伝道するとき『ハナニムは愛であって、罪の下にうちひしがれている人類を救おうと独り子イエスをわれらにお送り下さった。』という、非常に簡単なみことばをもって証しをした。しかし、このみことばは、自分の生活から溢でた証しであったため、人々の心を刺し貫いたのである。」(13)と述べている。

「水原の乗松牧師」は、水原の町ばかりでなく広く尊敬を集めるにいたった。しかし、激しい伝道の生活は体をむしばみ、夫人は、一九〇八年（明治四十一年）、三十三歳の若さでみんなにおしまれつつ召された。乗松雅休も結核におかされ、帰国を余儀なくされ、一九二一年（大正十年）二月十二日、「朝鮮に骨を埋めてくれ」と遺言し、小田原で召天した。

葬儀のとき、金太熙は、

「イエス・キリストは神様であるのに、人とおなりになされた。この愛に励まされて、乗松兄は朝鮮の人を愛しました。世の中に英国人になりたい人、沢山あります。米国人になりたい人、沢山あります。けれども乗松兄は、朝鮮の人になりました。この愛はいかなる愛でありましょうか、……このような悪い愚かな者のために、泣いたり、飢えたりしたあの心、このような者のために傷める心、終りまで交わってくれました。死ぬまで朝鮮々々と言って、天に行ってしまった。山を見ても、樹を見てもつまらない。あゝもう一度会いたかった。話をしたかった。朝鮮の子供等も、集会で祈ったけれども聴かれなかった。……けれども、主イエスの愛が共にあるのですから、主来り給う時を待って慰められるのです。」と泣きながら語られた。(14)

骨は分骨することなく水原に埋められた。

一九二二年（大正十一年）十一月十四日、朝鮮式の葬列が水原聖書講堂を出た。朝鮮式の土まんじゅうが盛られた。養われた信徒、ある者は五百名、ある者は千名と記す。朝鮮の新聞記者も列席しこれを報じた。墓前に碑が建てられた。碑文に、

「生きるも主のため、死ぬるも主のため、始め人のため、終わりも人のため、その生涯まごころをつくして愛し、おのれの主使命を帯びて、その一切の所有を捨て、夫婦同心、福音を朝鮮に伝う。数十年の風霜、その苦しみいかに。心肺は激しくいたみ、皮骨は凍え餓え、手足は病みそこなわれ、その朝鮮における犠牲きわまりぬ。しかも立ち居ふるまいはたゞ主に頼り、苦に甘んじ、楽しみ――苦に甘んずる楽しみ――を改めず、その生涯は祈祷と感謝なり。わが多くの兄弟を得、同じく主に会し、主の名は栄えを得。その生涯、苦にしてまた栄えなり。臨終の口に朝鮮兄弟のことを絶たず、その骨を朝鮮にのこさんことを願う。これわれらの心碑となすゆえん。しこうして主の再臨の日に至るなり。」

とある。(15)
碑文は金太熙の撰と書である。

乗松は朝鮮に同化し、朝鮮の人となった。そして、朝鮮の人を得た。渡瀬は、朝鮮の人を日本に同化させようとした。そして朝鮮の人を失った。与えることは、得ることである。愛することは、与えつくすことである。そして最も人の心をとらえるものは、愛である。「愛はいつまでも、絶えることはない。」

韓国の「韓日教会の歴史」の著者金守珍は、

「我らは豊臣秀吉の日本を憎む、
伊藤博文の日本を憎む、
しかし、名もない乗松雅休の日本を愛す。
乗松雅休のような善良な日本人を愛す。
日本人が残した良きものはなにもない。
しかし、愛の使徒が植えた愛の木だけは、
大きく育ち、今もそのまま残っている。」

と述べている。（国学院大学院生、金鐘賛訳）

三　曽田嘉伊智の朝鮮伝道とその姿勢

一九六〇年（昭和三十五年）一月一日の朝日新聞に、「韓国こそ私のふるさと――故郷へはやる心」と題する李承晩大統領あての公開訴え状が出された。写真入り八段抜きの特大記事である。韓国との国交回復前のことである。後に、天声人語の欄を担当することになる疋田桂一郎記者の記事である。少し長くなるが、曽田嘉伊智の全貌がわかるので、ここに引用する。(16)

李承晩さん。あなたは、日本のこの白ヒゲのおじいさんのことを覚えておられるでしょうか。曽田嘉伊智氏といい、あなたとは五十年以上もむかし、ソウル（京城）の韓国キリスト教青年会で知り合ったそうですが、この人がいま、なんとかして、あなたの国、韓国に「帰りたい」と熱願しているのです。四十年以上もの歳月をソウルで過ごした曽田氏は「韓国こそ私の故郷だ」と言っております。また曽田氏のこの願いを知った多くの在日韓国人も「早くかえしてあげたい」と考えています。「韓国人が友情をもって話しあえる日本人は、曽田さんだけだ」と言うのです。

孤児を育てて三十年、
あれから十二年、
李大統領との約束を待つ、

昭和二十二年十月、曽田氏は六ヶ月の予定でソウルから日本に旅立った。曽田氏の記憶が正しければ、お別れのあいさつにたずねた曽田氏へ、「自分はいま力がないが、いつか曽田さん、あなたを助けてあげよう」と約束なさったとい

うことです。

その後、日韓関係がむずかしくなって、曽田氏は日本で足どめを食ってしまいました。そして、もう十二年になります。

李承晩さん。曽田氏はいま、兵庫県明石市のある小さな養老院で、ひっそりと暮らしております。二十二年の末頃、ソウルを出発してから、日本じゅうをまわってキリスト教の伝道を続けていたのですが、三年前に大病で倒れ、（中略）ことし九十三歳。……（中略）……

曽田氏は、明治三十八年に韓国に渡り、翌年キリスト教に献身、ソウルの韓国のキリスト教青年会で日本語教師として働くことになった。その時の同会総務が、まだ三十歳になったばかりの李承晩さんだったということです。当時のキリスト教青年会は、韓国独立の民族運動がさかんで、あなたも先鋭分子の一人だった。

明治四十三年の日韓併合。

寺内初代総督暗殺事件に連座してあなたは捕えられ、その後米国に亡命された。たまたま曽田氏は日本旅行中だったが、もし、ソウルにいたら「私も李承晩氏の亡命のお手伝いをしていただろう。」とのこと。

李承晩さん。

しかし、曽田氏にとって忘れることのできない韓国のいちばんの思い出はといえば、あなたひとりの友情よりも、むしろ、あなたの国の子どもたちのことではないか、と思われます。

曽田氏はあなたの亡命後も、日本敗戦の日まで韓国に住み、孤児院を開いた。日韓併合時代の韓国には貧しい子どもが多く、三十年間に曽田さんが育てた子どもは千人以上にのぼりました。いや三千人だ、という韓国人もいます。ソウル市厚岩洞（元の三坂通り）にあった鎌倉保育園という、当時のソウル市では有名な孤児院がそれです。曽田氏はわずかな私財を投じ、たちまち資金難におちいってしまう。すると、園長、みずから大八車をひいて、食べものをもらいに歩く。いつも曽田氏は貧しい子どもと乏しい食べものをわけあい、同じボロをまとっていました。

曽田氏が育てた子どもたちは、いま日本にも大勢います。もう四十代、五十代のオトナですが、曽田氏は、時として近親者よりもこの韓国人を愛し、韓国人も曽田氏を慕っている。こんどの曽田氏のソウル行きを応援しているのも、そういう在日韓国人たちです。

李承晩さん。

曽田氏を慕っている韓国人のひとりは、こうも言っております。

「曽田氏は、いまの韓国であたたかく受け入れることのできる、たった一人の日本人だ」と。そして彼は、曽田氏といっしょに鎌倉保育園で奉仕していたタキ夫人をめぐる、次のような美しい話を教えてくれました。

二十二年の暮れ、曽田氏は奥さんをソウルに残して日本に旅立ったのでした。（それは、日本の敗戦は、日本人が韓国その他の国にたいして犯した罪の結果だと確信し、全国を巡回しながら悔改めを説くためと言われている。――「曽田嘉伊智翁」序より、筆者注）ところがご主人の留守中、二十五年一月にタキ夫人は七十四歳で亡くなった。そのとき保育園の出身者、社会人事業関係者はタキさんを慕って、盛大な「社会葬」をした、というのです。当時も韓国では反日感情が非常に厳しい時期でした。しかし、参列した韓国政府高官、知事、ソウル市長らの弔辞のなかで、このひとりの日本人女性は「慈母」「聖なる天使の化身」「偉大なる婦人」「民族のお母さん」とたたえられたのです。

李承晩さん。

「ソウルに帰れたら、是非、李承晩大統領に会いたい」と曽田氏は言っています。

そういう曽田氏に、あるとき、日本政府のある筋から「韓国に渡ってくれないか」という申し入れがあったそうです。

しかし曽田氏は首を横にふって、こう答えたということです。「キリストの愛において、隣人である韓国とゆるしあい、助け合おうと、私は思っているのだ。いきなり政治的なことを話し合えといわれても、私にはできません。」

李承晩さん。

「あなたは、日本のこの白ヒゲのおじいさんのことをいまでも覚えておられるでしょうか。」

以上の記事は、日韓両国に大きな反響を起こした。ソウルの知人たちは、「喜んで受け入れたい」と運動がおこされた。在日韓国の人たちが、韓国外務省に働きかけだした。曽田翁に、在日韓国の方々から感謝状がよせられた。ところが、韓国で政変が起き、李大統領はハワイに亡命してしまった。そして、一年有余がすぎた。しかし、その間もその訴えは生き続けていた。

一九六〇年（昭和三十五年）三月十一日、韓景職牧師から、曽田翁を韓国に迎える招待状と、財政保証書とが発送され、韓国政府当局も、この国境を越えた美しい「愛の招待」に賛意を表し、能う限りの協力を約した。そして、一九六一年（昭和三十六年）五月六日、朝日新聞社のヘリコプターが、近くの金城中学校校庭から伊丹まで翁を運び、伊丹から朝日新聞社機「第一朝風」でソウルまで送られた。

金ソウル市長は、

「戦前、数十年にわたってソウルの孤児、難民を助けてくれた曽田さんにご恩返しをしたい。これが市民の気持ちです。」と曽田翁に、「ソウル市名誉市民」の称号が贈られた。[17]

疋田記者の五月九日付の報道によると、

「独立後、たくさんの日本人が韓国にやって来ましたが、私たち韓国人が心からの感動をもって迎えた日本人はといえ

ば、今度の曽田さんが初めてです。そして恐らくこれが最後の日本人でしょう。」とソウル市民の一人が言った。また別の市民はこうもいった。「九千万の日本人全部が曽田さんと同じ気持ちになってほしいと思います。」[18]

曽田さんがソウルに着いた六日、たまたま同じ日の朝、自民党訪韓議員団がソウルに着いた。が、政治面の調子は、やや冷たく、警戒的であった。来訪した日本議員団はかつての帝国主義侵略を再開しようとしている、という意味の反日ビラを町にまかれた。

これに対して、曽田さんの記事は暖かく文句なしの「美談調」だった。

「聖者」「慈父」「アジアのシュバイツァー」「平和と愛の使徒」――

しかし、これらの賛辞と入りまじって、多くの人の話の中に、もう一つ別の共通の言葉があることに、私たちはすぐに気がついた。それは、日韓併合時代の三十数年間にわたる日本の「軍事的権力主義」と「暴政」……「イジワル」とであり、その中で、曽田さんただ一人が韓国人の味方であったこと、みなしごや難民のために自分で荷車を引いて食べ物を捜して歩いてくれたこと、また日本軍の迫害を恐れずに韓国人の政治亡命者を助けてくれたこと。だから曽田さんは「聖者」なのだという発想なのである。（筆者要約）

その後曽田翁は、かつての鎌倉保育園であった永楽保隣院で、殆どすべての韓国人に愛され、敬まわれ、九十五回の誕生日には、曽田夫妻に育てられて成人した保育園出身者や院関係者ら二百人以上の祝福を受け、涙を一杯ためて感謝し、それからまもなく地上の生涯を終えた。一九六二年（昭和三十七年）三月二十八日。

朴最高議長からも花輪が贈られ、再建国民本部長柳達永氏は、「全国民は、民族をこえた暖かい心で曽田さんの冥福を祈ろう。」とメッセージを発表し[19]、準国葬に匹敵する「社会葬」が決定された。

葬儀は国民会堂[20]で行われ、政府から文化勲章が贈られた。日本人として初めてのことである。[21]

何が韓国人をしてかくも曽田翁に感謝し、民族を越えて、彼を愛せしめたのであろう。資料が乏しくその全貌を正確に把握しえないところもあるが、簡単に略歴を追うと、

曽田嘉伊智は、一八六七年（慶応三年）山口県熊毛郡に生まれた。伊藤博文と同じ郷里である。小学校卒業後から二十歳位まで岡山の私塾に学び二十一歳頃長崎で炭坑、大浦小学校などで働きつつ英語を学び、二十五歳頃ノルウェーの貨物船の船員となる。香港、台湾、支那本土など転々とし、孫文との交友もあり、支那革命の激戦にも加わる。台湾にいた頃、道路上で行き倒れて一命の危なかった時、一韓国人に助けられ、一九〇五年（明治三十八年）、生命の恩人なる韓国人の祖国を慕って韓国に渡る。そしてＹＭＣＡの語学教師となる。その頃ＹＭＣＡは日本の侵攻に反抗する青年のアジトで、李承晩、李商在、金奎植などがいた。その年、伊藤博文も大使として朝鮮に赴き、翌年、総督府がおかれ、初代総督になっている。

一方、曽田はその年、平壌におけるリバイバルで霊的新生を体験し、献身を決意し、京城メソジスト教会の定住伝道師となる。また、聖書販売伝道を約十年間継続する。

一九〇八年、タキと結婚。

一九一三年、鎌倉保育園の京城支部が開設され、佐竹権太郎夫妻が経営に当たることになったが、氏の依頼により、園の相談役。

一九二一年には京城支部長、一九二六年には、タキ夫人も梨花女学校を退職して孤児のために働くことになった。

曽田は一九三〇年には理事となった。しかし、一九四三年、元山メソジスト教会の牧師代理として赴任し、園は夫人が引き受けることになった。

一九四五年、終戦と共に、廃園のやむなきにいたったが、新施設におくられた学童が泣いて戻って、「先生が引き揚

げるまでここにおいて」とせがまれ、永楽保隣院として再建されることになり、夫人はここで生涯を終える。

曽田は、日本に六ヵ月の予定で伝道旅行に出たまま、日本で足止めをくい、夫人とはそのまま今生の別れとなった。夫妻は、日本同胞、わけても為政者たちの、被征服者の立場におかれた韓国人に対する冷酷な行動と、その心の底にある優越感とを見聞きするたびに、日本人として懺悔せねばならぬと思い、またある時は抑えることのできない憤りを感じた。曽田は口癖のように、

「相すまぬ」「懺悔せねばならぬ」と言っていた。その思いを、孤児救出に注いだのだ、と『曽田嘉伊智翁』の著者鮫島盛隆は述べている。

晩年、鮫島が曽田翁の履歴を書きとめておこうとした時、曽田翁は、「私の履歴は、ものになりませんよ。罪悪に満ちた恥の一生でした。書きとめていただくことはありません。ただ言い残すことがあるとすれば、青年時代に香港に渡り、支那を流浪し、朝鮮に永住するまで、放浪者なる罪人曽田を、神様は決してお見捨てにならなかったこと、そして尊いキリストよるお救いをくださった御恩寵の事実のみです。」[22]と述べている。

当時韓国では、棄児、迷児が多く、十歳くらいになっても棄てられ、田舎では育ててもらえぬといって、わざわざソウルまで棄てに来る者もおびただしかったということである。

そんな孤児達を、寄付金をつのりながら、印刷業をしながら温かく育て、孤児達は立派に成人し、それぞれ社会で活躍するものとなっていった。その数は千人とも三千人とも言われる。

それが、晩年、朝日新聞の記事を皮切りに、日本と韓国の民族を越えた曽田翁のふるさと帰還の話となるのである。

思えば、「愛」、無私なる愛。「私は朝鮮で死なねばなりません。そうでないと朝鮮の兄弟達に申し訳ありません。韓国こそ私の故郷です。」韓国に骨を埋める曽田翁は、骨の髄まで韓国のものになったのである。韓国のものになってこ

そ、韓国の人を得たのである。

一方、初代総督、伊藤博文は、曽田翁と同郷、同年韓国統治の筆頭として入韓し、一九〇九年（明治四十二年）安重根に暗殺されている。何と対照的な姿であろう。

結び

以上、渡瀬常吉、乗松雅休、曽田嘉伊智の朝鮮伝道を一べつしたわけであるが、結局、伝道とは、渡瀬が言うように、相手を自分に同化させることではなく、主イエス・キリストが、神の子でありながら人となって下さったように、自分が相手の側に同化することではないだろうか。朝鮮を日本に同化するのではなく、乗松や曽田のように、自分の方が朝鮮の人になりきって、キリストが私たちにすべてを与え尽くして下さったように、すべてを与え尽くしてゆくことなのではないだろうか。

日本組合教会の朝鮮伝道理論も、一見、最も合理的で、相手の幸せを思ってのことのように見えるが、まことに自分本位の考え方ではなかろうか。

結局、組合教会の伝道理念は、そもそも信仰そのものに問題があり、深く国家主義とからまったものと思われる。

キリストは、私たちの罪のために死に、この世から私たちを贖って下さった。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられてしまったのである。私たちの信ずる信仰とは、世に死んだものではないのか。

今日でも韓国の兄姉に、乗松雅休、曽田嘉伊智のことは語り継がれており、日韓キリスト者交流の席上で「乗松雅休や曽田嘉伊智のようなクリスチャンになって下さい」と励まされている。

つまるところ、伝道とは、「愛」であり、愛とは、自己を惜しみなく与えてゆくこと、それだけなのではないのか。相手を自分の思うようにしたいという自己本位の愛ではなく、自分を相手に与え尽くしてゆくアガペーの愛、それを証しするのが伝道ではないのだろうか。

乗松雅休の葬儀の時、金太熙が述べた言葉にすべてが言い尽くされているように思う。「イエス・キリストは神様であるのに、人とおなりになりました。この愛に励まされて、乗松兄は朝鮮の人を愛しました。世の中に、英国人になりたい人、沢山あります。米国人になりたい人、沢山あります。けれども、乗松兄は、朝鮮の人になりました。この愛はいかなる愛でありましょうか。……」。

（原則として本文中敬称略）

注

(1) 「朝鮮」という言葉は、現在では主として北朝鮮をさし、南は「韓国」と言うが、戦前は両者合わせて「朝鮮」と呼んでいた。朝鮮という言葉には、今でも差別的ニュアンスがあり、一般的には好ましい言い方ではないが、南北を合わせた朝鮮を表す時には、「朝鮮」という言葉を用いさせていただいた。

(2) 小川圭治、池明観編『日韓キリスト教関係資料』（新教出版社、一九八四年）一四五頁。

(3) 飯沼二郎他『日本帝国主義下の朝鮮伝道』（日本基督教団出版局、一九八五年）八八頁。

(4) 西尾陽太郎『李容九小伝――裏切られた日韓合邦運動』（葦書房、一九七八年）二二一頁。

(5) 大野昭『乗松雅休覚書』（日本キリスト教史談会、一九七五年）二六頁。

(6) 前掲書、二七頁。
(7) 前掲書、二七頁。
(8) 前掲書、二八頁。
(9) 前掲書、二九～三〇頁。
(10) 前掲書、三〇頁。
(11) 前掲書、三一頁。
(12) 前掲書、五、三一～三二頁。土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教会史』（新教出版社、一九八〇年）三一四頁。
(13) 飯沼二郎他『日本帝国主義下の朝鮮伝道』（日本基督教団出版局、一九八五年）三一～三二頁。
(14) 大野昭『乗松雅休覚書』（日本キリスト教史談会、一九七五年）四九～五〇頁。
(15) 飯沼二郎他『日本帝国主義下の朝鮮伝道』（日本基督教団出版局、一九八五年）四六～四七頁。
(16) 鮫島盛隆『曽田嘉伊智翁』（牧羊社、一九七五年）一二一頁。
(17) 前掲書、一四一頁。
(18) 前掲書、一三八～一四〇頁。
(19) 前掲書、一四五頁。
(20) 前掲書、一四八頁。
(21) 前掲書、一五五頁。
(22) 前掲書、八六～八七頁。

参考資料

小川圭治、池明観編『日韓キリスト教関係資料』（新教出版社、一九八四年）。
飯沼二郎他『日本帝国主義下の朝鮮伝道』（日本基督教団出版局、一九八五年）。
西尾陽太郎『李容九小伝――裏切られた日韓合邦運動』（葦書房、一九七八年）。
大東国男『李容九の生涯』（時事通信社、一九六〇年）。
大野昭『乗松雅休覚書』（日本キリスト教史談会、一九七五年）。
土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教会史』（新教出版社、一九八〇年）。
鮫島盛隆『曽田嘉伊智翁』（牧羊社、一九七五年）。
大村晴雄『日本プロテスタント小史』（いのちのことば社、一九九三年）。
金守珍『韓日教会の歴史』（大韓基督教、一九八九年）。
呉台『日韓キリスト教交流史』（新教出版社、一九六八年）。
庚培『韓国キリスト教会史』（日本基督教団出版局、一九八一年）。
塩野和夫『日本組合教会史研究序説』（新教出版社、一九九五年）。
松本頼仁『嘉新』二四三～二六二号。
朝日新聞縮刷版。

（単立久遠基督教会牧師）